

論文要旨

1. 祝 嬌梅(シュク キョウバイ)(中国)

越境する乙女ゲーム 一日中相互交流における受容及び変容―

キーワード: 乙女ゲーム、異文化伝播、日中比較、ローカライゼーション

要旨:

乙女ゲームとは、女性向けに製作・販売され、プレイヤーが女性主人公となり、男性キャラクターとの恋愛を主題とするゲームの総称である。日本発祥の乙女ゲームが中国市場に流入し、中国国内で独自の受容と変容を遂げた後、再び日本市場へと「逆輸入」される現象が、近年生じている。

本論文では、日中間の乙女ゲームをめぐる相互交流の過程を踏まえ、日中両国における乙女ゲームの受容と変容を明らかにするとともに、ローカライゼーションの視点から乙女ゲームの越境的な伝播を分析した。

中国への日本の乙女ゲームの正規輸入は制度的障壁により困難だったが、非公式活動が文化的基盤を形成した。その後、中国国産乙女ゲームは「プレイヤー中心」へと変容し、日本市場進出では、「同化」と「異化」のローカライゼーションが展開された。グローバル化時代におけるゲームローカライゼーションの実践は、不可欠かつ深化の一途をたどっている。しかし、対象文化への適応と自文化の積極的な発信という2つのベクトルの間に存在する張力を顕在化させてもいる。

2. ドーンプライパーン, ケームチラー(タイ)

日本とタイの大学入試制度の違いによる受験生のストレス

キーワード: 大学入試制度、受験生、高校生、受験ストレス、日泰比較

要旨:

日本とタイでは、選抜方法や出願方法など、大学入試制度にさまざまな違いがある。このような制度の違いは、受験生のストレスにも影響を与えられと考えられる。日本とタイの受験生の受験勉強や大学入試制度に対する認識にはどのような違いがあるのか、また、制度の違いが受験生のストレスにどのような影響を与えているのか、そのストレスには共通点や相違点があるのかを明らかにするため、大学入試制度と受験生のストレスについて研究することにした。

本論文では、大学入試制度に対する認識と受験ストレスに着目し、タイと日本の大学1年生を対象にアンケート調査を行った。その結果をもとに、大学入試制度に対する認識や受験ストレスについて比較・分析・考察を行った。

アンケート調査の結果から、日本とタイの受験生はいずれも大学受験に対して高い精神的ストレスを感じていることが明らかになった。一方で、大学入試制度の違いや教育環境により、受験生がストレスを感じる要因や、その現れ方には違いが見られた。

3. ゴ, ヴー フオン ゴック(ベトナム)

日本とベトナムの高等学校歴史教育の比較

キーワード: 歴史教育、教育改革、生徒の資質・能力、日本とベトナムの比較

要旨:

歴史教育は、各国の基本的な知識の基盤となるもので、若者に自国の歴史認識を理解させるために、これまでさまざまな改革や提案が行われてきた。世界や自国の歴史の説明には、各国で多様な方法が用いられている。さらに、歴史的事象についても、それぞれ異なる視点から論じられている。そのため、日本とベトナムの歴史教育には違いがあると考えられる。

2022 年、日本とベトナムではほぼ同じ時期に歴史教育改革が実施された。なぜ両国は歴史教育を改革したのか、従来の教育と新しい教育にはどのような変化があるのか、また、日本とベトナムの歴史教育にはどのような違いがあるのかという疑問を持った。そこで、両国の高等学校の歴史教育を比較し、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とした。

研究の結果、日本とベトナムの歴史教育は、ともに現代社会において従来の知識や学習だけでは対応できず、生徒の資質・能力の育成を重視し、グローバル化する世界の要求に対応することを目指していることが分かった。さらに、両国はそれぞれの歴史的背景を踏まえた教育を行っており、歴史的事象の理解や歴史認識に違いが見られた。

4. タンサワンクン, ジャックワリン(タイ)

日本とタイの歯に対する美意識の比較

キーワード: お歯黒、八重歯、歯列矯正、美意識、日本とタイの比較

要旨:

日本とタイにおいては、かつて「お歯黒」や「ビンロウを噛む」といった歯を黒く染める共通の習俗が存在したが、近代化の過程における西洋化の影響により、「白い歯」を理想とする美の基準へと移行した。現代においても、「白く整った歯」への強い憧れやホワイトニングへの関心が共有されている一方で、歯並びや審美歯科に対する価値観には両国で大きな相違が存在している。

本稿では、日本人とタイ人の 20 代の若者を対象にアンケート調査を行い、歯の色や歯並びに対する価値観やイメージの実態を明らかにした。調査結果をもとに、両国の歯に対する美意識の共通点と相違点を比較して考察した。

アンケートの結果から、両国の歯に対する捉え方には共通点と相違点が見られた。両国ともに八重歯に対しては肯定的であり、ホワイトニングは費用面が共通のハードルとなっている。また、犬歯の評価や歯列矯正治療を「目立たなさ」で選ぶ日本と、「ファッションや社会的ステータス」と捉える人もいるタイとの違いなど、文化的背景による認識の差があることがわかった。

5. 庄 嘉勅(ショウ カロク)(中国)

なぜ「友達」ではなく「友だち」か —表記の選択に見る日本語の変化と文化的背景—

キーワード: 友達、友だち、表記選択、漢字表記、交ぜ書き表記

要旨:

日本語には漢字、ひらがな、カタカナの 3 種類の表記がある。書くときは文部科学省の『常用漢字表』に基づいて表記を選択することが推奨されている。しかし、「ともだち」は「友達」と表記することが標準とされているが、日常生活からメディアまで多岐にわたって、交ぜ書き表記の「友だち」を目にすることは珍しくなく、漢字表記と比べて互角、あるいは多いとさえ感じられる。

本論文では、「友だち」と「友達」との表記選択に着目し、文献コーパスや実例を踏まえて、両表記の出現頻度及び使用場面について調査を行った。調査結果をもとに、表記の言語学的内因と社会的要因を分析した。

結果としては、「友達」表記より、「友だち」表記のほうが柔らかく、親しみやすく、読みやすく、実用性が高いことが明らかになった。そして、「友だち」表記はこのような特徴を持っているため、LINE をはじめとする SNS において多用され、人々が日常生活でよく見かける表記になったことがわかった。